昔、野原の中に一軒家があった。家には爺さまと婆さまと娘の三人暮らしであった。ある大雨の降る晩、山の虎が何か喰うものないかと、のそりのそり一軒家へ来た。そのとき爺さまは、そら〝古屋のモリ〟が来た。そらまた来たと言った。娘が〝古屋の漏〟はそんなにおっかないかと訊いたので、この世の中で古屋の漏ほどおっかないものはない。そしたら娘が、それならオイヌよりも虎よりもおっかないかといったので、オイヌよりも虎よりもおっかないと答えた。それ訊いていた虎は、おれより強い古屋の漏のこないうちといって退散した。